

## 第2分科会

# ケアワークの充実 とケアのネット ワーク



### 村尾素子（労協センター事業団荒尾地域福祉事業所「クラナド」）

「協同を拓く2002全国集会 in九州」のメインと位置付けられた第2分科会の趣旨は、「ケアワーカーの連帯、ネットワークづくりのきっかけとなるような分科会」づくりであった。

しかし急遽召集された実行委員とあわただしく依頼を受けたコーディネーター、コメンテーターとの打ち合わせの中では議論の方向性を見据えて報告者を選ぶところまでは及ばず、とにかく「協同」をキーワードにケアを語る現場の方々を必死に口説くので精一杯だった。しかしセンター事業団、福岡福祉生協の事業所を中心にNPOで活動をされる方や当事者の方など、結果的には幅広い方々からの報告をいただき、さまざまな実践、経験、そして疑問、希望などが共有できたのではないかとおもう。

またケアワークの質、「専門性」ということが大きく取り上げられ、集まったケアワーカーたちには改めてこの仕事に飛び込んだその思が何であったのかを振り返り、現実との整理をつける時間となったのではないだろうか。

まず報告者の内容を紹介し、分科会全体の議論の内容を簡単に整理して報告とした。

### センター事業団島本地域福祉事業所「ふくしあ」 平野さん

働いていた社協を「不完全燃焼」の思いで辞め、センター事業団に飛び込んできた5人のメンバーで10月に1人増え6人。ヘルパー経験は長いが会社を立ち上げるとなると何も知らず、みなで集まって話し合い、一人60万ずつだして有限会社を立ち上げようと準備をはじめた。ふくしあの名は花の名前。「やさしい心」という花言葉と、色あせずに落ちる花にちなんで。しかし手続きをするが、公証人役場でつき返され、法務局で指導をされ、次第に自分たちだけでできるのかと不安に。所長のだんなさんがたまたまセンター事業団を聞き知っていて、調べて関西の事業所をみてからセンターへと飛び込んだ。

週1回2時間程度ケース検討を自主的に行い、新しい情報と技術の共有化、ケアの統一とヘルパーの特質を出すことを大切にしているという。「ヘルパーが健全な心でいることが重要」と、なるべく事務所に寄り、仕事の悩みを家に持ち帰らずその場で解消するようにしている。ケアマネもいるので先々は居宅も開き、いずれ地域の人が誰でも寄れる街角カフェを開きたいと思っている仲間も。「ゆっくり、急がず、地道に丁寧な心

### 報告者

- (午前) 平野幸江 (センター事業団島本地域福祉事業所「ふくしあ」)  
原島由美子 (福岡県高齢者福祉生協「千代事業所」)  
北本節代 (NPO 法人地域助け合いの会「生活支援センターささえあい」)  
(午後) 渡辺隼子 (福岡県高齢者福祉生協「ケアワーカーズステーション帆柱」)  
江頭博幸 (NPO 法人いきいき北九州)  
根本佐智子 (医療法人親仁会「グループホームひまわり」)

### コーディネーター

- 名和田澄子 (福岡県高齢者福祉生協理事)

### コメンテーター

- 賀戸一郎 (西南学院大学教授)  
永戸雄三 (センター事業団専務理事)

温かい良い仕事をしていくことが信用信頼に結びつき、やがては経営にも」と地域に対する思いを語っていただいた。

### 高齢者福祉生活協同組合・ヘルパーステーション千代の原島由美子さん

開設当初はサービス提供者が1名、非常勤ヘルパーさんが10名足らずの小さな事業所で居宅・訪問看護、訪問介護の併設で連携したサービスを提供。現在は常勤者が6名うち管理者が1名サー責任者3名、常勤職員2名、非常勤35名計41名のスタッフ。そして訪問看護婦さんが10名、ケアマネが2名総勢53名の大所帯となる。

県による所長管理責任者、サー責任者、主任クラスの研修で感じたことを「国の問題、介護保険自体の問題、市の問題などはぜんぜん取り上げられず、ヘルパーさんの質だけが問われることに疑問」と話す。「果たしてヘルパーさんにどれだけの責任があるのか、ヘルパーに対する研修も不十分なまま、介護保険が導入された」「2級研修をばたばたと終えたヘルパーが、地図を片手に導入研修もほとんどないまま飛び込んだにも関わらず、それを質が悪いといわれる」ことに対し、「むしろ私達がヘルパーさんに一つ一つ

勉強させられ、育てられている」という言葉にも出ているように、現場で奮闘するヘルパーの立場を代弁してくれた。

また『ケアの充実とケアのネットワーク』に対する取り組みでは、まず「ケアとは何かということのをのびのびと考えられ、ヘルパーさんがいつでも寄れる環境」での月1回の研修、調理実習の状況を報告し「質の向上のためには研修とかロールプレイ」が重要と強調。また再アセスメントをすることで整備されていると自負していた書類を見直し、利用者が見えてきたことについても触れ、「再アセスメントをもとにカンファをするとヘルパーさんの中からたくさんの意見があがり、ヘルパーから活発に意見が出るようになった」とも。

ネットワークづくりについてはペットの世話を頼まれたときにボランティアであるなど、枠外サービスの可能性と運営委員会による地域住民参加などの計画を紹介。生協らしいケアを目指し、福祉生協の理念「住み慣れた地域で誰もが生きがいを持ち、安心して病み、老いることのできる街づくり」にむけての意気込みが感じられた。

## NPO法人地域助け合いの会「生活支援センターささえあい」北本さん

特定非営利活動法人、NPO法人で介護保険事業以外に「赤ちゃんからお年寄りまで、というより生まれる前からなくなった後まで」の12の事業をしている玉名の助け合い組織。今回の分科会でもっともエネルギーが湧き出した取り組みの発言であった。「人づくり」という視点からヘルパー研修の問題点を指摘し、「心をこめて人材を送り込まないと、福祉の事業がぼろぼろになってしまう」という。「同行訪問を終えたらプロフェッショナルという意識を持ってほしい、利用者さんには年数は関係ないのだから」、「誰が行っても身体介護の4020円はくるのだから、人材育成に時間を130時間で終わらないだったらその要望を出すべきだ」とも。またプライバシーを理由に受け入れない事業所について「研修はどこの事業所もやらなくちゃいけない仕事」ということも付け加え、一流の講座を作っていくという意気込みを話された。

また今後の取り組みとして、託児、宅老、レスパイト、障害児の一時預かりを紹介。「福祉は中央で語ろう」と商店街活性化とからめシャッターどおりをあけて60坪のビルディングを使う。全部助成金を申し込み、あわせると全部で16事業になるという。

なお介護保険でできないところ(一般ケアと呼んでいる)については、保険サービスの前と後に1時間足すなどしている。送迎サービスも「てくてく券」なるものをつくり1枚600円、会員外の互助作用で行う。一般ケアと介護保険の関係は「介護保険だけで充実なんて無理」と、「採算は取れないけどそれで止めるわけに行かない」、あとはネットワークを駆使して「あちこちの財源全部使って提供していくというのがこれからの福祉サービス」と、深く豊かな実践と締めくくった。

また学生からのボランティアに関する質

問に、学生のいいかげんさを厳しく指摘、ボランティア同行に命をかける事業所の思いと若い人たちに対する檄が飛ばされた。

## 福岡県高齢者福祉生協「ケアワーカーズステーション帆柱」渡辺さん

帆柱の利用者であり、運営委員でもある。かつて教師をしていた関係で教育の市民団体に関り、不登校の子供たちのケアのネットワークへ関心をもっているが、今回集会に参加し協同という概念への共感を持ったと話し始める。

リウマチで35歳ごろに発病、59歳で2号被保険者として要介護1だが、ここ2、3年で元気になって活動も広がった、それは介護保険でヘルパーさんがくるようになってからという。子育ての時期出会った「あゆみ保育所」が現所長の毛利さんとの出会いで「私の人生に若いときに関わった人たちに、年を取って障害者になって支えてもらっているっていうことを、深い縁(えにし)と感じる。ほんとに大事な宝」とはなす。ヘルパー講座の講師を頼まれ、自分中途障害者として思い出したくない話しをするなかで、「話すことの意味を対象化できるようになり、癒されていった」経験にも触れる。また「現場の中で体験的に学んでいくしかないところがある」点で、教員養成とヘルパー養成の共通点があると話した。

ヘルパーさんが掃除してくれることで「生活空間がすっきりするとストレスが解消され、家族にやさしくでき、自分自身にも余裕ができる」、そして「いっつもいっしょに働く中で、気がついたら体力がががった」とも。可動域が広がり、できないことができるようになる、まさに自立支援を実感しているなかで「QOLを地でいっている」と医師からも言われるという。そうしたエネルギーを社会参加に向けて、それがまた張りになってまた元気になるという循環が暮らしの中にうまれるなかヘルパーの役割として

「生活意欲の向上」をあげ、「利用者が主人公になれる」ことの重要性、「その人がどう生きたいか、どう暮らしたいか、ということを支援するのが大事では」と実感を込めて話す。

また事業者やネットワークの重要性についても「介護保険が入ることですぐに援助が求められる、何かあったら相談できる、そういう事業所がそばにおってくれる、専門家がいてくれる、そしてそれにつながるネットワークがあるってことは、すごく安心につながって、生きる気力とか意欲につながってくる」といい、地域コミュニティのあるべき姿を彷彿とさせた。

一方自分の父上のことを「誇りが強くある高齢者に対してどういう言葉かけをすれば、動かない父を動かすことができるのか」と、高齢者を抱える家族の思いも語られた。「主体」という言葉をカギに、不登校の子供や高齢者の問題に希望をどうつなげていけるのか」という率直な疑問は多くの人が共感したのではない。「協同という言葉によってイメージが豊かになった」といいながら、「人間の人生ということを見通して考える」こと、また運営委員会の活動から「いつも支えられている利用者も帆柱を支える関わりあい」の重要性、そしてヘルパーさんへ「ばらばらにされている人と人との関係性を仕事を通しながら、ささやかでも、つなげていく役割」を期待するとエールを送っていただいた。

## NPO 法人いきいき北九州 江頭さん

内部障害者の人たちを中心にした介護保険事業をしているということで、本人も透析患者である。週三回必ず病院にく内部障害者の社会的入院の問題にぶつかり通院事業「さわやか」を立ち上げた。またホームヘルプがないと家に変えられない人のためにホームヘルプ事業を介護保険施行に伴いNPO法人をとって介護保険事業者となる。仲間

が仲間を助け合う、ということを理念にしているなかで、介護保険の問題点について指摘していただいた。まず「事業所は介護度が上がったなら喜ぶというのは介護保険の根本矛盾」と介護認定の問題。第2に訪問介護の移動の際の賃金が単価に含まれていないことについて。第3に送迎について行政の指針がころころ変わることによって利用者が不安になっているという点。

また枠外のサービスについては責任の所在をはっきりさせないと難しいと指摘があった。市との密な関係の中で、障害者当事者の生活を安定させるための事業を、安定的に行っている事業所との印象だった。

## グループホームひまわり 根本さん

大牟田の高齢で貧困な地域の診療所に新しく併設したグループホームでの実践を紹介。見守りを基本に家庭的な生活と、その人らしさを大切にしたケアが特徴という。痴呆があっても普通の暮らしができることをモットーに、病棟とは違うゆったりとしたケアに遣り甲斐を感じていると報告された。1年間やってきた感想として、痴呆で一人暮らしの方の多さに驚き「9床では足りない」とも。また「グループホームで一番合う人は、一人暮らしでアルツハイマーの方。短期間であうのは、施設から在宅への中間、生活リハビリの必要な方」だという。在宅で見切れなくなった人を地域全体でどう見ていくかということのひとつの視点をいただいたとおもう。また家族との連携、約束事の重要性に触れ、「ケアプランも家族と話し合って決めていくという点では、在宅と同じ」であるし、連絡ノートの役割など、ケアサービスの共通の課題もかいまみえた。グループホーム固有の課題としては急遽ベッドが空いたときに採算だけを重視するのではなく、短期の人をうまく組み合わせしていく工夫が必要だという。住所も移し、荷物も全部持ってきているかたが5人、「その人たちの生活



を背負っている」ということからすると、簡単そうに見えて重たい部分もあるという話があった。

また数年前の家族会の経験の中から、制度を改革するための運動の必要性にも触れられる。

質疑の中で「グループホームでどこまでみれるのか」という質問に対しては「ADLの状況とグループホームのつくりにもよる」とのことだった。

## コメントと全体の討論

### ボランティアの位置付け

事業所としての区分けや責任の所在、有償ボランティア的働き方の方について労働条件の整備の問題などでやり取りがあり、いろんな関り方、働き方がある非営利・協同陣営の共通の課題として認識された。

### 利用者とヘルパーは対等か？

「言いたい放題の利用者もいるから、その辺は国のほうでもうちょっと事前の対策が必要だったのではないか」という意見から、「ヘルパーは専門職なのだから、対等ではなく専門職としての意識を持っているべき」との対論。また「基本的には利用者もヘルパーも対等だ」という考え方も出された。賀戸先生からは「勝手な要求を突きつけるということと、本当にその人の生活を支えていくときに必要なことを、ちゃんと見極めるのがプロの目」「ただ一方的に要望するからもうしらは前進しない。やはりプロのほうはその辺をきちっと受け止めて、それを説得していく能力、コミュニケーションの能力が必要」との話しなされた。

### ヘルパーの身分、待遇

「たった130時間の講習でいい資格ではなく、本当は国家資格が必要。看護婦のように教育制度そのものを高めてもらわない」というのはケアワーカーズステーション帆

柱の毛利さん「看護婦もかつては地位も給与も低かったが、運動の中で変わっていった。ぜひ皆さんで訴えていきましょう。」と呼びかけがあった。賀戸先生の話の中でも、「実践しながら、勉強しながら、やっぱり運動していくという視点が大事」と「ソーシャルアクション」の不足が訴えられた。

### 介護保険制度の問題点

永戸さんからは、報告の中にあつた具体的な制度の問題点に付け加えて、地域が利用者もサービス提供者も包んでいろいろな形で支えるということが大事であり、「介護保険が利用者とヘルパーの孤立した関係になってい」る現状をとらえ、「全市民がこの制度に責任を負おうということの徹底がないと、利用者も発達しないし、ヘルパーも発達しない」と指摘。「自分たちの地域や自分たちに関する大切なことには自分たちが力を出してほしい」という市民が増えてるなかで、「利用者本位」というより「市民本位」の視点の重要性を話された。

### ケアワーカーの質・専門性

永戸さんは「審議会などでどうしたらケアワーカー一人一人がどう言う風に考えて成長発達したらいいのか、どうしたらほんとに期待されるケアワーカーになってサービスの質を上げることができるのかという観点からはまだ指針がはっきり出されていない」ことや「単価のなかにフォローアップ研修をきちっとやるような費用があるのか」という行政や制度上の問題点とともに、事業所のあり方、問題点として「要介護の人に善意でいってて、結果、ずっと重度化が促進されるようなことをしている面がないか」などに目を向ける必要性を指摘された。

また少子化の問題に触れ「高齢者の介護だけではなくて、子育てのことだとか地域全般の福祉を高めるためにどうするのか」という観点を持ちながら、ケアワークやコ

コミュニティケアというものに取り組む、「地域の福祉を総じて引き上げていくような集団」になってほしいと励まされた。

賀戸先生からは「専門性」の中身を3H (HEART、HEAD、HAND)、さらにハートの中身として (HEALTH: 心身ともに健康である) (HONESTY: 誠実さ)、(HOPE: 希望) で6H、と言う形で整理がされた。ヘッドとハンド (狭い意味での専門性) と、ハートとの関係について、協同、共生という概念について「ブームになっている協同・共生の重み、異質なことも受け入れて話し合っていていこうということならば、厳しいこの社会のなかでやり遂げるためには、そのことの本質をしっかりと押さえていく学習みたいなことも大事」と、エールも含め協同・共生の可能性に対する期待を語られた。

また養成研修自体が専門職養成のレベルかどうか疑問があるという学会の議論も紹介。さらに介護保険では分断されたような状況だが、「介護サービス、家事サービス、相談業務というのが三位一体、セットになっている、それを分離したところで介護サービスの特質はでない」と、ケアワークが看護婦さんと違う特徴を大事にするべきだと話された。

最終的に過渡期だからこそ「専門性を磨くこと」「評価に絶えうる質を持つこと」が求められると指摘。そのために積極的に第三者評価を受けていくことが重要とする。

### ケアワークと協同について

これも賀戸先生より、「狭い意味でのケアワークに関する知識だけでなくコミュニティ論を学び、地域づくりの認識をもって働くことがケアワークを通じての街づくりにつながる」との話があり、それは「ソーシャルワーカーとしての力量」が求められることでもあると、大きな期待が寄せられた。

### 最後に

予想以上に『協同』ということを多くの人々が共感し、その内実を描こうと実践している姿を感じられる分科会であった。ひとえに皆さんの日々の実践の奥深さゆえと感じている。不十分な事務局の体制におおらかに引き受けいただいた諸氏に改めてお礼を申し上げたい。

